

# 霞

—2014年度春季展示室だより—

土浦市立博物館

平成26年5月13日発行(通巻第27号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(27)  
古写真「櫓門と土浦幼稚園児」



## 目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(27)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び各展示と催し物等】
- 「常陸国風土記」(古代)・・・2
- 山村才助著「訂正増訳采覧異言」と対露危機(近世)・・・3
- 歴史を語る漆椀(近世)・・・4
- 明治はじめの土浦城(近代)・・・5
- 真鍋小学校の奉安殿(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「霞」の魅力について・・・8
- コラム(27)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

昭和13(1938)年の園外保育記念写真です。左手に櫓門がみえます。背景の巨大な宿り木は、クロマツの樹幹にエノキが着生した共生木で、のちに県指定文化財になりました(枯れて現存しません)。土浦城跡は昭和10年に亀城公園として本格的に整備されたため、新しい植栽もみられます。

【情報ライブラリー検索キーワード「亀城公園」】

## 博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★

5月18日(日)・6月15日(日) 両日とも午後2時~(1時間30分程度)

テーマ:「考古学上から見た古代信仰遺跡」 会場:博物館視聴覚ホール

★★はたおり体験★★ 6/21・6/28・7/5・7/12・7/19・7/26(いずれも土曜日)

さき織り(裂いた古布をよこ糸に使う織り方)を体験します。 ※要予約です。詳細はお問い合わせください。

★★土浦ミュージアムセミナー2014★★

土浦地域の歴史について、学芸員が研究成果をお話します。

6月15日(日)「古代信太郡と7世紀の東北政策」堀部猛

6月22日(日)「土屋家刀剣の伝来とその背景」中澤達也

6月29日(日)「灯心専売と土浦藩」木塚久仁子

7月6日(日)「幕末動乱期の土浦」野田礼子

7月13日(日)「日枝神社流鏝馬祭の成立」萩谷良太

時間:各回午前10時~11時30分まで

会場:博物館視聴覚ホール

受講料:各回50円(資料代)

定員:各回50人(当日受付)

お問い合わせ:土浦市立博物館

(029-824-2928)

★★文化財愛護の会写真展★★ 5月29日(木)~6月21日(土)

★★拓本同好会作品展★★ 6月25日(水)~7月19日(土)

★無料開館のお知らせ★ 5月18日(日)国際博物館の日

★今年度の春季展示は5月13日(火)~7月13日(日)までです★ ※休館日は毎週月曜日です



博物館マスコット  
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

ひたちのくにふどき

# 「常陸国風土記」

— 古代の人々のくらしと信仰 —

「風土記」は、常陸国、播磨国、出雲国、肥前国、豊後国の五国のみが伝わっていて、「常陸国風土記」は現存する貴重な一冊に数えられます。奈良時代初期の和銅6（713）年に元明天皇の詔によって「風土記」編さんが国々に命じられ、「常陸国風土記」は養老5（721）年から神亀元（724）年頃には成立していたと考えられています（小笠原亨「『常陸国風土記』の成立について」『風土記の考古学① 常陸国風土記の巻』1994年などを参照）。当時の常陸国（おおよそ今の茨城県）の地誌や説話などがまとめられており、古代の人々のくらしや信仰の一端を窺い知ることのできる大切な文献です。現在の土浦市域は、その南側が古代の信太郡、北側が茨城郡にほぼ該当します。以下に、当地の人々のくらしぶりや信仰を彷彿させる「常陸国風土記」の「信太の郡」、「茨城の郡」の一節をご紹介します（秋元吉郎校注『風土記』日本古典文学大系2 岩波書店などを参照し口語訳しました）。

○「信太の郡」 東海道の駅路で常陸国の入り口にあたる榎浦の津（現稲敷市、利根川左岸あたり）には駅家が置かれている。伝駅使（都からの役人）らは、この地に着くとまず口と手を洗い、東を向いて香島（鹿島）の大神を遥拝し、そののちこの国に入ることができる。

昔、倭武の天皇が海辺伝いに巡幸し乗浜に至ったとき、浜にたくさんの海苔が干してあった。これにより「のりはま」の村と名付けられた。乗浜の里から東に行くと浮島の村がある。海（霞ヶ浦）に浮かぶ孤島で、山野が多く人家は十五軒ばかり。田は七、八町余あるが、住民はおもに塩づくりを営んでいる。この島には九つの社があり、皆、言動をつつしんで暮らしている。

○「茨城の郡」 郡家（郡の役所）の西南にある信筑の川（現恋瀬川）は、筑波の山から流れ出て、西から東へと郡内をめぐって高浜の海に注いでいる。ここ（高浜）では、草花の香る春、また落葉の秋に乗り物を走らせ、舟を漕いで出かけ遊ぶ。春には水辺の花が千々に咲き、秋には岸の木の葉が色づく。野には鶯がさえずり、水には鶴が舞うのが見える。村里の男たちや漁夫の娘たちが浜に集まり、商人や農夫たちも小舟を操って行き交う。夏には、朝夕に友を誘い、僕（召使）を連れ、浜辺に出て海を眺望する。

郡家の東十里のところ桑原の丘がある。昔、倭武の天皇がこの丘の上に留まれ、お食事を供した時、水部（天皇の飲食物をつかさどる集団）に新しい井戸を掘らせた。天皇は、清く香しい出泉の水をたいそう美味しく飲み干され、「よくたまれる水かな」とおっしゃったので、里の名を田餘（玉里）と呼ぶようになった。

（塩谷修）



「常陸国風土記」版本・信太郡の部分  
（当館所蔵）

7/5（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 常陸国信太郡中家郷の調布（復元）（当館所蔵）
- 田村沖宿遺跡群出土墨書土器「國厨」（当館所蔵）



やまむらさいすけ

ていせいぞうやくさいらん いげん

# 山村才助著「訂正増訳采覧異言」と

## 対露危機

江戸時代の世界地誌書で最高峰とされた「訂正増訳采覧異言」とその著者山村才助(1770~1807)について「霞」第15号でご紹介しました。国学者平田篤胤(1776~1843)は「万国を知るのにこんな良い本はない」と語ったといひます(『古道大意』)。才助が33歳でまとめたこの書は本文12巻、地図1巻の大著で、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、南方諸島、オーストラリア、アメリカが網羅されています。

今回はこの書が著された背景についてご紹介しましょう。世界地図や地誌の編さんは、幕府が直面していた問題、日露間に戦争が勃発するかもしれないという危機感と大きな関わりがありました。

明和8(1771)年、ハン・ベンゴロウ事件が起こりました。ポーランド・ロシア戦争でロシア軍の捕虜となったハンガリー貴族フォン・ベニョウスキーが書いた手紙のなかの「ロシアは南下して日本を狙おうとしている」という部分が翻訳されて日本に伝えられ、フォン・ベニョウスキーの名前がハン・ベンゴロウと和訳されました。この噂は広がり、工藤平助「赤蝦夷風説考」や林子平「三国通覧図説」「海国兵談」が編まれました。

寛政4(1792)年、エカテリーナ2世の命をうけたラクスマンは、漂着してロシアにいた大黒屋光太夫を伴って根室に来港し通商交渉を行います。幕府は受理しませんでした。文化元(1804)年10月にはロシア領アメリカ会社支配人レザノフが仙台の漂流民を伴って長崎に来港しますが、幕府がふたたび通商を拒否したため、文化3(1806)年から翌年にかけてロシアは樺太や択捉を襲撃しました。

当時幕府の中枢にいた田沼意次、次いで松平定信は蝦夷地の開拓を計画し、地理や資源を確認するために巡検使を派遣しました。また、ロシアの通商交渉を拒否した幕府は、ロシアの侵入と戦闘に備えるため南部・津軽・秋田・庄内の諸藩に出兵を命じ、文化5(1808)年には仙台・会津藩も出兵して状況が緊迫しました。しかし、文化8(1811)年、国後に上陸して監禁されていたロシア海軍軍人ゴロウニンが釈放されると、軍事的緊張はひとまず緩和されました。



山村才助著「訂正増訳采覧異言」(部分)

当館所蔵

対露危機に際して必要となったのが正確な世界地図であり、地誌でした。文化13(1816)年、幕府天文方高橋景保の銅版地図「新訂万国全図」が刊行されました。それ以前に、蘭方医前野良沢が「カムチャッカ記」「ロシア本記」を、桂川甫周が「北槎聞略」を著しています。そして才助の師大槻玄沢は「環海異聞」を編さんしました。享和3(1803)年、才助が著した「訂正増訳采覧異言」は玄沢に提出され、幕府に献上されました。刊行されることはありませんでしたが、つぎつぎに写されて多くの写本が伝わっています。(木塚久仁子)

6/28(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近世コーナーに展示)

- 坤輿万国全図 山村才助旧蔵(江戸時代中期)
- 采覧異言(江戸時代中期)
- 訂正四十二国人物図説 山村才助著 享和3(1803)年



# うるしわん 歴史を語る 漆椀

## — 大国屋勘兵衛家と徳兵衛家 —

大国屋徳兵衛家（大徳）に伝わる漆椀から、土浦の商家の歴史が見えてきます。

初代徳兵衛（1741～1815）は香取神宮の神官尾形数馬の四男として生まれました。豪商国分勘兵衛（大国屋）が営む土浦の醤油屋に23歳で奉公し、のちに支配人に昇進、天明5（1785）年45歳のとき暖簾分けを許されて大国屋を名乗り、中城町（現土浦市中央一丁目）に穀物や古着を扱う店を構えました。

漆椀は土浦周辺では作ることができません。土浦の商家には輪島の漆製品が伝わっており、この漆椀も金沢地方で製作されたものかもしれません。霞ヶ浦・利根川水運によって土浦に運ばれてきました。

大徳の漆椀は蓋と身が十個ずつ木綿の袋に入れられ、数十個が木箱に納められていました。大徳にはこのような椀・膳・皿・茶碗・杯などを納めた木箱が数十箱も伝わっています。これらは冠婚葬祭において、来客に食事を振る舞うために用いられました。現代社会では結婚式や七五三、葬儀や法事などの行事は式場や斎場、料理店などで行われるのが一般的ですが、江戸時代はもちろん、昭和30年代頃までは自宅に人を招いて式や儀礼を行っていました。

土浦の商人色川三中の日記には、自宅での饗応に料理人を頼んでいたことが書かれています。時には数十人となる招待客をもてなすには家族や親戚だけでは間に合わず、本職の料理人を呼んで、味も見栄えもよく仕上げていたのです。

大徳の漆椀には重要な点があります。箱の蓋裏の墨書です。「安永七戌霜月上旬改 大国屋徳兵衛」と書かれています。この「分」を「屋」に書き直し、「大」と「徳兵衛」を書き加えました。本来は「国分」と書かれていたのを「大国屋徳兵衛」に改めていることから、この漆椀は安永7（1778）年に国分勘兵衛家の什器として調えられ、天明5年大徳開店以降大徳に譲られたと推測されます。

初代徳兵衛が独立するに際しては元手が要ります。経営が安定するまでは赤字を補填しなければなりません。本店国分勘兵衛家は、大徳の初期経営を財政的に支援していたことが古文書から判明しています。この漆椀は財政面

のみならず、物質面でも本店が別家をささえ、ともに経営の向上を目指した商家のありようを伝えています。（木塚久仁子）



「蓋裏」「漆椀」（個人所蔵）

5/31（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 式目（大国屋徳兵衛家） 文化7（1810）年
- 目録下書（大国屋徳兵衛家） 江戸時代後期



# 明治はじめの土浦城

## — 一枚の古写真より —

明治4（1871）年の廃藩置県、同6年の太政官布告以降、土浦城の土地と施設はいったん国有となり、それから払い下げになるなどして、姿を消すものもありました。城の出入口にあたる南側の枳形や北側の馬出も、直線的な道に改修されています。

城の中心である本丸とその周辺はどのように変わったのでしょうか。本丸館が明治4年に土浦県庁から新治県庁、さらに同11年には新治郡役所として引き続き官有物として利用され、櫓門・霞門・東西の櫓など本丸周辺の建物はそのまま残されました。

写真は、近年市民の方からご寄贈いただいたものです。正面には櫓門、左手奥には本丸館の屋根と玄関がみえます。櫓門には表札がかかっていますが、残念ながら文字は読み取れません。右側の松の向こうには、鐘楼と東櫓が確認できます。鐘は、現在等覚寺（現土浦市大手町）にある銅鐘（国指定重要文化財）です。鐘の由来は、もともと藤沢城内極楽寺（現土浦市藤沢）にあったものが後に土浦城に移され、さらに極楽寺にゆかりの深い等覚寺に明治17年に移されたと伝わっています。また、橋の下にあるべき堀はすでに埋められているようです。左手の土塁上には、土塀の一部と思しきものも確認できます。

いつ頃撮影されたのでしょうか。写真の裏には、「昔土浦城表門及東屋庫鐘堂影 表面城ハ故土屋氏ノ領タリシナリ 明治十七年旧三月二日夜十二時頃発火シ明三日後二時頃迄燃工鎮火セリ（後略）」とあります。本丸館は、明治17年の火災で焼失し、東櫓も火災の影響で取り壊しになったと言われおり、写真は明治4～17年に撮影した、現在確認できる旧土浦城の最も古い写真の1つといえるものです。写真の裏に「31, 六月」と墨書きがあることから、「昔」の写真を明治31年6月にプリントしたと推測されます。

手前の橋周辺には、ざんぎり頭に袴姿の男たちが写っています。元の土浦藩士たちでしょうか。思い思いのポーズをとる人たちは、それぞれ引き締まった面持ちです。幕末から明治はじめの土浦を支えたであろう人たちの姿もおさめた、貴重な1枚といえましょう。（野田礼子）



櫓門前での記念写真（当館所蔵）

**5/24（土）午後2時から**  
このページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示）

- 常陸国新治県庁郭土浦町総図 明治6年（当館所蔵）
- 土浦城址写真 明治時代後期（個人所蔵）
- 新治郡土浦町全図 昭和4年（当館所蔵）



# 真鍋小学校の奉安殿

## — 戦前・戦中の学校の風景 —

真鍋小学校の校庭の真ん中にあるソメイヨシノ（県指定文化財）は今年も華やかに咲きました。この真鍋小学校にも、戦時中には全国各地の小学校と同様に、「奉安殿」と呼ばれる建物が校庭の一角にありました。

奉安殿とは、昭和 10（1935）年前後に全国各地の学校に整備され、御真影ごしんえいと呼ばれた天皇と皇后の写真と教育勅語ちよくごを収めるためのものです。真鍋小学校では昭和 16（1941）年に校庭の東南角に完成しました。

御真影は明治 26（1893）年に奉戴ほうたいし、校長室内の御真影奉安所に収めていました。儀式の際、特に三大節さんたいせつ（1月1日元旦始祭げんしさい、2月11日紀元節きげんせつ、11月3日天長節てんちようせつ）には、教職員と児童が学校に集まり、御真影への最敬礼や校長による勅語の奉読ほうどくが行われました。校長が白い手袋をして、箱に入った御真影をひとつひとつ丁寧にあげたこと、紫の袱紗ふくさに包んであった教育勅語をおごそかに取り出し、読んだことなどが卒業生に記憶されています。子どもたちにとっては式後に配られる菓子が楽しみとなっていたといえます。戦前・戦時中の天皇制教育は、このような形をとりながら浸透していきました。

真鍋小学校に奉安殿建設が計画された昭和 15 年は、紀元二千六百年記念行事が各地で行なわれた年です。初代天皇である神武天皇じんむが即位したとされる年を紀元とすると、昭和 15 年は 2600 年にあたるとされたことから、国をあげて奉祝行事が行われました。真鍋町では広く町民から寄付金を集め、昭和 16 年春に、神明造り形式の奉安殿を完成させています。奉安殿の前には白線が引かれ、地区ごとに登校した児童はその白線のところに整列し、上級生の合図で最敬礼をして教室に入ったそうです。当時の教員のひとりには「今にして思えば確かに神がかりでもあったと反省させられるが、一面国家目標が浸透していて子どもながらに目に一種の輝きがあったことが妙に印象に残っている」と在職中の思い出を記しています。

昭和 15 年 11 月 3 日に土浦町と真鍋町が対等合併し、土浦市が誕生、翌年 4 月には真鍋小は真鍋国民学校と改称、7 月に大洪水、12 月に太平洋戦争開戦と続き、内外がめまぐるしく変わる時期に奉安殿は建てられました。終戦後の昭和 21 年、超国家主義的・軍国主義的物件の処理が通達され、戦時下教育の象徴といえる奉安殿は同年 7 月に取壊しとなり、学校から姿を消しています。（野田礼子）

※参考文献『創立百周年記念誌なでしこ』



奉安殿竣工式『皇紀二千六百年記念 写真帳』より



真鍋小学校奉安殿『むかしの写真土浦』より

6/7（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示）

- 奉安殿建設費寄付者名簿 昭和 15 年（当館所蔵）
- 奉安殿設計図面 昭和 15 年（当館所蔵）
- 『皇紀二千六百年記念 写真帳』 昭和 16 年（当館所蔵）



## 市史編さんだより

### ～～ 『家事志』に見る女性の生き方 その一 ～～

『家事志』は文政9(1826)年から安政5(1858)年まで30年余りにわたって書かれた商家の日記ですが、その中には様々な女性が登場してきます。江戸時代の女性というと、夫や家にしばられて忍従の生涯を送ったようなイメージがあるのではないのでしょうか。本当にそうなのか、『家事志』に出てくる何人かの女性を取り上げ、その生き方について2回にわけて書いてみたいと思います。

私達のイメージに最も近いのは色川三<sup>いろかわみなか</sup>中<sup>みとし</sup>・美年<sup>みとし</sup>兄弟の末妹にあたる「まき」ではないでしょうか。『家事志』第一巻の文政9年6月の祇園<sup>ぎおんまつり</sup>祭の時のことです。7歳の「まき」がお祭りに出ることになりました。ほかの家の人達は皆ご法度であるにも拘わらず、絹の晴れ着を着ているのに、三中は「まき」に木綿の着物しか着せなかったのです。さぞ肩身の狭い思いをしたことでしょう。その後、母の妹で親戚の商家に嫁いでいる「むら」が中風<sup>ちゆうふう</sup>になり、女手のない家へ叔母の看病と、家内取り締まりのために行かされます。叔母が天保5(1834)年に亡くなると、商家に内儀<sup>ないぎ</sup>がないのは困ると親戚から迫られて、当主の二男で従兄にあたる七兵衛に嫁ぐのですが、その時もほとんど祝儀らしい祝儀もせぬまま、追い立てられるように結婚します。ろくな嫁入り仕度もしてもらえず、満14歳で商家の内儀として一家の切り盛りをすることになったのです。しかも夫となった七兵衛は商売に身を入れず、美年に「身上向きも覚束なく親類にも見放される」と諫められたりもしています。また酒乱で「まき」はたびたび暴力をふるわれ、実家へ逃げ帰ったりしますが、結局は又婚家へ戻って何人もの子どもを生き育て、夫を支え家を守って、明治44(1911)年に亡くなるまで、激動の時代を苦難に耐えてしっかり生きた女性でした。更に、「まき」の二女「てい」も三中の死去後、三中の跡を継いだ養子政吉の後妻に、という親類達の画策によって、政吉と結婚することになるのです。母娘二代にわたって、親類達の思惑に振り回され、しかし不満も言わずきちんと暮らして、生涯を全うしました。

三中の2度目の妻「せぬ」は、畑仕事などにも従事し、商家の嫁としてそれなりにやっていたようですが、三中の母との仲がよくなかったように思われます。三中にとってたった一人の娘である「ゆみ」を産みますが、天保5年三中が川口蔵へ移った頃離縁されて実家に帰されます。「せぬ」は婚家に置いてきた娘「ゆみ」に会いたくて、谷田部<sup>やたべ</sup>から来るのですが、会わせてもらえません。ひと目見ようと、手習いに通っている「ゆみ」の帰りを、途中の道で待っていたり、成長して江戸へ行儀見習いに行った「ゆみ」に会おうと、江戸まで出掛けて行ったりもします。娘に会えない母の切なさが感じられて、哀れを誘うところです。

『家事志』の中の女性で最も心を惹かれるのは、美年の2度目の妻である「らく」だろうと思います。母親を早く亡くして、母親の実家に引き取られ、苦勞して育ったのでしょう、堅実でしっかりした性格の女性だったようです。美年との間に7人の子を産みますが、3人は幼くして亡くなります。その悲しみを乗り越えて、商家の内儀として家を盛り立て、親戚とも仲良く付き合っている様子が読み取れます。異母妹にあたる「てる」の相談にもものっているようです。また土浦藩士長島尉信<sup>ながしまやすのぶ</sup>は、弘化3(1846)年の水害の時、美年の家に2ヶ月近く滞在して、家族同様に暮らしていました。勿論美年と尉信が親密であったことによりますが、寝食の世話をする「らく」の人柄がよくなければ、そのように長期にわたって家族同様に暮らすことは出来なかったでしょう。このこと一つをとっても「らく」がいかに美年にとって頼りになる妻であったか分かります。骨惜しみせずせつせと働き、周りの人達に深い愛情を注いでいた「らく」ですが、安政4(1857)年病気になる、美年は何人もの医者を呼んで診てもらいます。天王様に神楽<sup>かぐら</sup>を奉納したり、鶴の肉が病に効くと聞いて求めたり、と様々手を尽くします。また親戚・知人など大勢の人が看病に来てくれたのですが、翌年38歳の短い生涯を閉じます。まさに、典型的な商家の内儀、といえるのではないのでしょうか。

『家事志』が第六巻をもって完結しました。是非御覧下さいませ。

(市史編さん係非常勤職員 菅井和子)

# 霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、昨年開催した講座「土浦の幕末を古文書で読む」に参加された藤井安明さんに寄稿いただきました。

## 「霞」の魅力について

現在私は「(土屋家の家臣であった)先祖の物語」を本にまとめようとしています。私どもの先祖がそれぞれの時代とどのように関わって生きてきたのか、生き生きと描きたいと考えています。正史ともいべき『土浦市史』に頼って書いていますが、これだけでは読んで面白いものが書けるとは到底思えません。歴史の面白さは血の通った温かな人間・目に浮かぶような情景を描くことにあると思います。それは様々なエピソードを積み重ねて書くことにより可能になると思います。「霞」にはそうしたエピソードがふんだんに盛り込まれています。

たとえば「霞」第24・25号には祇園祭ぎおんまつりのことが詳細に記されています。土浦がちょうど祭礼の真っ最中である正徳元(1711)年6月13日、先祖は江戸から土浦に着任しています。これにより先祖がどんな熱い思いでお練行列を見つめていたかを想像することができます。また「霞」第22号には、宝暦6(1756)年秋に藩主土屋篤直あつなおが土浦に帰り2ヶ月ほど滞在していて、この間の江戸に暮らす生母栄寿院と妻登恵子とえことの手紙や好物のやり取りが記録されています。篤直は妻には目薬を届けるなどいたわりをみせ、母には本丸庭・二の丸庭でとれた椎の実などを送っています。ちょうどこの時分、先祖は麻布下屋敷で栄寿院に仕えていましたので、母から息子に送る好物の煮豆やさつま芋の手配を言いつかつたかもしれないと想像します。

このように私にとって「霞」は貴重な情報源になっています。「霞」には「歴史を掘り起こし、もっと面白く知ってもらおう」という博物館スタッフの情熱が感じられます。これからも感謝しながら読み続けたいと思います。  
(「土浦の幕末を古文書で読む」受講者・ファインショナルランナー 藤井安明)

## コラム(27) — 「もしもし、博物館ですか」—

博物館の電話が鳴ります。

「もしもし、雛人形をかざったけど古そうだ。いつ頃の時代のものか教えて」

「もしもし、小屋に昔の農機具があるけど、要らないかな？ 見においでよ」

雛人形も農機具も、現場に直行して拝見します。雛人形の時代を特定するのは難しいです。年代が記してある例は少なく、明治なのか、大正なのか、それとも昭和初期なのか？ 付属する雛道具が母子二代、あるいは三代をかけて少しずつ集められていく場合もあり、総体で考えると時代に幅が出ます。また、蔵や農機具小屋を解体するからといって、中に入っている道具をそっくり保存できる訳ではありません。無数のモノの中から、どれを半永久的に保存すべき資料とするのか、学芸員のみで選択する必要があり、これも難しい問題です。

冒頭に掲げた電話は平成26年2月から3月に寄せられました。市民の皆さんの要望が寄せられているのに、満足に対応できているか、はなはだ疑問です。でも、博物館に気軽に電話をかけてくれる方、時にはモノを持って見せに来てくださる方が着実に増えているのは大きな喜びです。「もしもし、博物館ですか」をこれからもお待ちしております。  
(木塚 久仁子)

## 情報ライブラリー更新状況

【2014・5・13現在の登録数】

古写真 527点(+5)  
絵葉書 434点(+5)

※( )内は2014年1月5日時点との比較です。  
展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2014年度  
春季展示室だより(通巻第27号)  
編集・発行 土浦市立博物館  
茨城県土浦市中央1-15-18  
TEL 029-824-2928  
FAX 029-824-9423  
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>  
1~6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

次回夏季展示は、2014年7月19日(土)~11月16日(日)となります。「霞」2014年度夏季展示室だより(通巻第28号)は7月19日(土)発行予定です。次回のご来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます(カラー)